

大衆文芸地図

虚構の中にみる夢と真実

尾崎秀樹



大衆文芸地図

虚構の中にみる夢と真実

尾崎秀樹



桃源社

大衆文芸地図【桃源選書】

5 5 0 円

著 者 尾 崎 秀 樹

発行者 矢 貴 昇 司

印刷者 川 瀬 壬 子

発行所 株式会社 桃源社

東京都中央区日本橋鰯穀町 1-12

電話(666)4001~2 振替東京64351

昭和 44 年 9 月 20 日 印刷

昭和 44 年 9 月 25 日 発行

1969 ©

大衆文芸地図

目次

虚構のなかの英雄たち	3
近代日本文芸の萌芽——三遊亭円朝	11
大正期ロマンの宝庫——《立川文庫》の世界	18
峠の感覚——中里介山	24
合せ鏡として見る歴史文学——吉川英治	32
捕物帳の世界——野村胡堂	41
偶像破壊の文学——直木三十五	64
国民文学の実験——白井喬二	71
調和と均衡の結実——大仏次郎	78
庶民の心の子守唄——長谷川伸	86
大衆文学の枕木——佐々木味津三	95
一人三役の孤独——林不忘	105

聞書・鶴沼閑話——子母沢寛	127
悲壮美の世界——尾崎士郎	161
庶民的共感の開花——山本周五郎	172
『山嵐』に馳せる大衆の夢——富田常雄	185
うそと知りつつ聞く話——川口松太郎	193
時代ユーモアの創造——山手樹一郎	204
足輕精神の所産——海音寺潮五郎	211
真実を描く虚構性——柴田錬三郎	218
マゲをのせた現代小説——南条範夫	224
内側なる大衆の存在——司馬遼太郎	229
あとがき	

大衆文芸地図

虚構のなかの英雄たち

下剋上の英雄譚

ドイツの革命的な詩人ハイネに次のような言葉がある。

民衆はふしぎな気まぐれをもっている。民衆は自分の歴史を歴史家の手からではなく詩人の手から受けとりたいと願うのだ。民衆が願うのは、赤裸々な諸事実の忠実な報告ではなく、それらの諸事実が生まれた本源的な詩の中にとかされた諸事実なのだ。

これはなにも歴史の科学性を否定する言葉ではなく、むしろ歴史のなかにひそむ詩情について語ったものといえよう。「諸事実が生まれた本源的な詩」こそ、大衆の望む歴史の姿なのだ。英雄抒情詩も、そういった民衆の夢のなかにはぐくまれる。

しかも歴史のなかに、民衆が望む理想像がとぼしい場合には、歴史上の人物を虚構化し、時には完全な虚構を歴史にもちこむことでその憧憬を満足させるものだ。日本の説話、講談、大衆文学などに登場する英雄像は、そのようなものとして理解することができる。

日本の大衆文学は、大正の末期、大衆社会の出現とともに成立した。一種の商品的文学である。しかし「大量消費のための商品文学」と規定したのでは、はみ出す部分がある。それは日本の大衆が泣

き笑いを仮託した文学的伝統の現代版であるという点だ。

歴史の人気者は、ほとんど中世末期からの都市の発展の上に形成されている。生産力の発展にともない、下剋上などといわれるような風潮をとおして、大衆の夢がある程度まで自由に表現できたことが理由である。徳川期に入ると、この夢はさらに歌舞伎や寄席芸の中で培養され、実録本その他を介して、虚構の度合いを加える。

大衆文学の主人公たちは、ほとんどこの人気者の伝統に立つと言ってよからう。

大衆は生きてゆくうえで、満たされないものを、虚構に求める。つまり現実の不足部分を、夢で埋めてゆくものだ。日吉丸伝説で有名な挿話に、彼が矢作橋やはしの上で蜂須賀小六と出会う箇所がある。しかし歴史的にはまだここには橋が架っていないかったことが実証されている。つまり大衆は必要とあれば、橋のないところに橋をかけるくらい朝飯まえだということになる。そのいい例が伊賀上野の荒木又右衛門の敵討ちだ。又右衛門は講談では三十六人斬ったことになっている。しかし実際には二人しか斬らず、しかも相手方の仲間に頭をどやしつけられて昏倒



したという。だが大衆はその敵討ち話を伝承する際に、実説を
すて、虚構化することで、イメージを育てたのだ。

それと同様なことが、大衆文学の世界でも生まれてくる。

ニヒルの剣士竜之助

イタリアの思想家グラムシは、大衆文学の主人公にふれて
「いったん大衆の知的生活のなかに入ると、その文学的ななり
立ちをはなれて、りっぱな歴史上の人物になる」と書いたこと
があるが、たしかに猿飛佐助も眠狂四郎も現在では、歴史上の
人物と同じような人気をあつめる存在となった。

大衆文学の研究にとって、作中人物論が、読者論や作家論以
上に重要な役割をはたすといわれるのは、このことを指す。ほ
んらい大衆文学は、作者の個性的創造であるまえに、大衆の英
智の産物である。すぐれた大衆作家は、大衆の意識にひそむさ
まざまな欲求を具象化し一つの人物像をつくり出す。大衆文学
が大衆とともに創造する文学だといわれるのは、この創造の奇
蹟をさすのではないか。国民の文学といわれるのも、この問題
をぬきにしては考えられない。



吉川英治



山本周五郎



大衆文学の人気者のなかで、ひととき目立つ存在は、中里介山の『大菩薩峠』に登場してくる机竜之助である。「人間の生命を喰わなければ生きてゆけない」という無明の剣士竜之助が、大逆事件の直後に造型されていることは『大菩薩峠』の思想的な位置を物語ると思うが、それだけに現実に対する一種の虚妄感が強いのはやむを得ない。

竜之助は御嶽神社の奉納試合で宇津本文之丞を倒して以来、遍歴の旅をつづける。それはそのまま人間世界の宿業（しやくごふ）になっ

てゆく姿だといっている。

このニヒル剣士の像は、やがて大仏次郎の堀田隼人や林不忘の丹下左膳、群司次郎正の新納鶴千代（にいなづま）をへて、戦後の眠狂四郎へつづく。堀田隼人（『赤穂浪士』）は、生まれてきたのがまちがいだと思うほどの虚妄感にとりつかれた若者だ。彼は行くさき先に、社会の厚い壁を発見する。彼は浅野方の動勢をさぐるスパイ役をつとめるが結局はむなしく生きた余計者にすぎない。日本のバザロフであり、時にはオブローモフなのであった。さらに新納鶴千代（『侍ニッポン』）では「きのう勤王あしたは佐幕、その日その日の出来ごころ」の主題歌どおり、はげ



しいファッショ的弾圧下にあえぐインテリ層の転向現象を諷するおもむきさえあった。

さらに片眼片腕の怪剣士、丹下左膳ではどうだろうか。乾雲^{けんうん}坤竜^{こんりゅう}のふたふりの陣太刀をめぐるあらそいは、やがてこけ猿の壺の争奪戦となり、文字どおり波瀾にみちたロマンを展開する。だが、そのニヒル剣士の影には、大衆の夢がどこかにやきついていたのだ。戦後の眠狂四郎になると、そのイメージはさらに明確となる。

眠狂四郎は、のろわれた出生のために多難な人生行路を歩まなくてはならない。しかも柴田錬三郎の功績は、こういった状況設定のほかにそれまで一刀三拝式に武士道のたましいあつかいしてきた剣を、一つの殺しの凶器と見たて、ドライに処理しようとした点にも戦後が投影している。

ニヒル剣士像が比較的多いのはそれだけ日本社会のひずみを物語るのかもしれない。

鼻のシラノ誕生す

それに反して明朗タイプの人物は白井喬二『富士に立つ影』



野村胡堂



子母沢寛

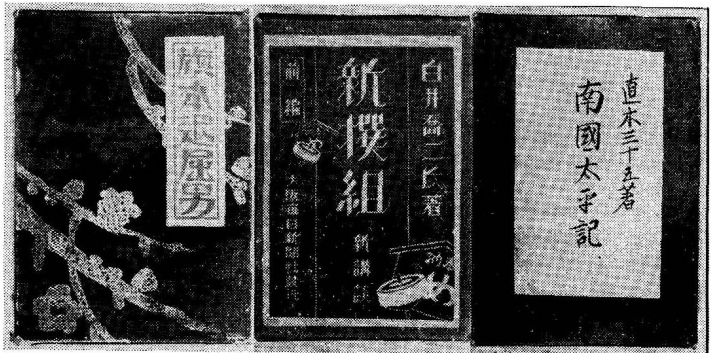


の熊本公太郎にはじまり、阿地川盤嶽、戸並長八郎、早乙女主水之介などがあり、さらに山手樹一郎の諸作に登場する人物へひきつがれて戦後に到っている。白井喬二の阿地川盤嶽は「虫けらだ。虫けらが怒ってなにがでしよう」と自省する阿Q的人物。さらに長谷川伸が創造した戸並長八郎は、シラノ・ド・ベルジュラックの日本版としても読める愉快な作品。長八郎のおちい様への恋情はロクサーヌとシラノの恋を物語るようだ。

しかし明朗タイプを定着させたのは、なんといっても山手樹一郎であろう。桃から生まれた桃太郎のニック・ネームのとおりに、気はやさしくて、剣には強く、正義のためには率先して悪に挑戦する。さらに入生田村の夢介や又四郎となると、イメージは、より明確となる。千両箱をになって江戸へ色道修業へ出てくる夢介は、戦後、六大都市の主食配給量が、二合一勺だった当時の民衆のあこがれの的だったし、剣を否定されたあとの時代ものの方向を暗示した。

明暗二相の侍たち

このニヒル剣士と明朗タイプの間には、無数の人気者が存在す

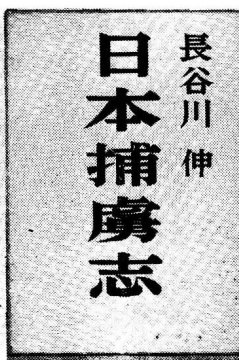


る。

まず維新の志士のなかでは、倉田典膳こと鞍馬天狗（大仏次郎）や、死んで護国の鬼となる月形半平太（行友李鳳）。剣客ものでは、実在の人物もふくめて、伊藤一刀斎から塚原卜伝、柳生一族、宮本武蔵、佐々木小次郎をへて、島田虎之助や千葉周作、あるいは榊原鍵吉にいたる諸タイプがあり、忍者には猿飛佐助、霧隠才蔵から、なにがしの「くノ一」女忍者まで登場するのだ。

またやくざ世界に眼をうつせば国定忠治や清水次郎長、あるいは天保水滸伝や甲州遊俠伝の諸人物となる。むかしならば長谷川伸の戯曲でおなじみの番場の忠太郎や駒形茂兵衛、沓掛時次郎に、鯉名の銀平。子母沢寛のものなら、中乗り新三や投げ節弥之、大前田の英五郎や小金井小次郎といった顔ぶれ。

一転して捕物帳になると三河町の半七から投げ銭の名人銭形の親分、人形佐七に釘抜藤吉、それに池田大助から右門、遠山の金さん、若さま侍や顎十郎ということになりそうだし、お家騒動なら、原田甲斐、大槻伝蔵、栗山大膳、相馬大作、御落胤なら天一坊から葵新吾まで数えられる。



尾崎士郎

富田常雄

そのすべてにふれることのできないのが残念だが、大衆文学のヒーローやヒロインたちは、日本人の感情をたっぷりとしみこませた人物であることだけは変らない。そこには日本の大衆の泣きと笑いが投影しているわけである。

近代日本文芸の萌芽——三遊亭円朝

『大衆』の中で

日本の近代文学史の叙述は、ほとんど二葉亭や透谷からはじまるのが通り相場になっている。近代的自我の形成をお題目にするかぎりそうなるのもむりはないが、そのために幕末から明治にかけてある程度みられた庶民的成熟（とくに話芸の）が、不当に低く見られる結果をまねいた。パターンをヨーロッパ近代に求め、追いつき追いこそうとする努力が、庶民の持つ多くの感情や情緒などを正しく継承できなかったのである。

本来西欧の近代文学は、西欧近代社会の精神的遺産であって、それを前近代的なものを多分にのこしている日本につき木したところで、正しい発育はのぞめない。誰が考えても明らかで、こんな事柄に気づかなかつたほど、当時のインテリはお目出度かつた。

天保改革らしい自主的なものをすっかり脱落させていた戯作文学などには、それほど期待できないが、三遊亭円朝や二代目の松林伯円などの話芸には、文学を再生させる新しい力がうずいていた。それはロマンを支えるたくましい構想力である。

円朝の芸は個性的である前に、まず大衆的であった。三度にわたる芸風の一大変革も大衆の動向を